

「自治会組織の可能性」

学籍番号 12992026 番

木原 巧

立 木 茂 雄 教授

目次

- 1 はじめに・・・4
- 2 自治会の歴史とその評価・・・5
 - 2.1 自治会・・・5
 - 2.2 自治会の歴史・・・5
 - 2.3 自治会の評価・・・6
 - 2.3.1 自治会をめぐる議論
 - 2.3.2 戦後～1950年代
 - 2.3.3 1960年代～1970年代
 - 2.3.4 1980年代以降
 - 2.3.5 自治会をめぐる議論のまとめ
 - 2.4 問題提起・・・11
- 3 自治会の活動事例及びその考察・・・11
 - 3.1 本章の位置づけ・・・11
 - 3.2 活動事例1 - 山田区民会 -・・・11
 - 3.2.1 地域概要
 - 3.2.2 六甲山と住吉川
 - 3.2.3 若宮八幡宮の再建
 - 3.2.4 水車
 - 3.2.5 本住吉神社のだんじり
 - 3.2.6 そのほかの取り組み
 - 3.2.7 住吉学園
 - 3.2.8 考察
 - 3.3 活動事例2 - 今出在家町自治会 -・・・16
 - 3.3.1 地域概要
 - 3.3.2 歴史・史跡
 - 3.3.3 兵庫運河
 - 3.3.4 和田神社のだんじりとおみこし
 - 3.3.5 自治会館の再建

3.3.6	考察	
3.4	活動事例 3 - 桜木町自治会	19
3.4.1	地域概要	
3.4.2	細い路地とまちの緑	
3.4.3	道路建設反対運動	
3.4.4	公園づくり	
3.4.5	考察	
3.5	活動事例 4 - S 自治会	22
3.5.1	地域概要	
3.5.2	自治会の取り組み	
3.5.3	考察	
3.6	小括	23
4	仮説の検証	24
4.1	本章の位置づけ	24
4.2	変数の設定	25
4.3	データの分析および考察	26
4.3.1	自然	
4.3.2	歴史を感じさせるもの	
4.3.3	イベント	
4.3.4	共有スペース	
4.3.5	まちの雰囲気	
4.4	小括	37
5	自治会組織の再考	37
5.1	自治会の必要性	37
5.2	自治会参加への誘因	38
6	結論	40

自治会組織の可能性

学籍番号 2026 番 木原 巧

1 はじめに

本稿は地域活性化における自治会組織の可能性を模索することを目的とする。具体的には、地域活性化に寄与する組織として自治会を位置づけたうえで、どういった要素が自治会活動を活発にさせるのかを明らかにしたいと考える。

自治会は日本文化あるいは日本の社会の根底を形づくっている非常に重要な集団である。しかしながら、この自治会ほど肯定・否定の評価が分かれる集団は少ないといえよう。自治会という名前を聞くだけで拒絶反応を起こす人びともいる反面、自治会があつてこそ地域の問題が処理できるのだと考える人びともいる。実に賛否両論さまざまである。

では、なぜ筆者は自治会を肯定的に評価するのか。それは地域には地域住民にしか解決できない課題が存在するからである。美化活動にしても、防犯・防火活動にしても、ある程度は地域が担わなければならない。行政に依存してばかりいると、いざというときの対応ができない。このことは阪神淡路大震災の事例が示している。まさに生きるか死ぬかの危機のときに助けてくれたのは近隣の人である。実際、阪神淡路大震災では自治会が機能しているところは危機からの脱出も早かったと言われている（東海自治体問題研究所編 1996: 14-27）。こうした危機に対応できるのも普段からの自治会活動の蓄積があつたからこそである。そうした意味でもやはり自治会は必要である。

自治会を地域生活に必要な組織として位置づけたうえで、いかなる要素が自治会活動を活発にさせるのかを述べることは十分意義のあることだと考える。その理由は自治会活動が活発になれば、人びとが地域をよりよくしたいという思いを強くし、ひいては地域活性化につながるからである。

本稿では以下、第2章においてこれまでの自治会の歴史とその評価について概括する。第3章では筆者が行った自治会のリーダー層への聞き取り調査をもとにどういう要素が自治会への参加を促すか、その仮説を立てる。第4章では第3章で得られた仮説を統計データを用いて検証する。第5章では第3章、第4章で得られた結果を従来の議論と照らし合わせる。そして、最後の第6章で筆者としての見解を述べたい。

2 自治会の歴史とその評価

2.1 自治会

日本の都市には、どこへ行っても自治会とよばれる地域住民組織が存在している。いまではだれもその存在にさしたる疑問をもたないが、この自治会という組織は戦後さまざまな形で議論され、研究の対象とされてきた。また、現在でも特に自治体行政との関連でこのような組織が無視できない存在でありつづけている。

本章ではこれまでの自治会の歴史とその評価について概括し、その存在を改めてとらえなおしたうえで、問題提起を行いたい。なお、本稿においてはこうした地域住民組織を原則自治会と表記することにする。

2.2 自治会の歴史

自治会がそもそもいつ頃形成されたのか、その起源について、中世に求めるものもあるが(岩崎ほか編 1989)、本稿では明治以降における自治会の歴史を概括することにする¹⁾。

明治20年までたいへん複雑な地方行政組織の変遷をかいくぐりながら、自治会がある種の姿をとりつつ形成されてくる。ときの政府は地方公共団体としての町村整備に力点を置いており、かつて部落や町内を構成していた青年団や神社などの組織もより広域の町村の単位に編成されることになる。しかしながら、こうした地方自治の整備は地域住民の実態に即するものではなかった。そのため、地方自治の制度の枠外に私的な生活組織として自治会が形成されることになる(鳥越 1994: 10-18)。

昭和期になるとこうした自治会の公認化の動きがみられるようになる。東京市(当時)では昭和10年代前半にかけて町会整備の動きが見られる。また、内務省は昭和15年の内務省訓令により自治会を公認する。その後、昭和18年の市制・町村制改正により自治会が法認される。内務省は当初、地域的な住民の自主的な協同組織の組織化を意図し、種々の法的整備を行ってきた。しかしながら、その後の国内情勢の変化によりこれらの組織は戦時対応組織として整備されることになる(鳥越 1994: 10-18)。

戦後、この種の地域住民組織が戦争に加担したとして、GHQの方針により自治会の解散が命じられる。しかしながら、戦後の治安や衛生、物資の配給などの問題が発生し、これに対処するため自治会に代わる類似の組織が誕生することになる。その後、昭和27年にサンフランシスコ講和条約が発効し、それと同時に上記の政令が失効することになる。これ以降自治会が急速に再編成されることになる(鳥越 1994: 10-18)。

昭和 40 年代には地域社会の弱体化が叫ばれる一方、人々の自治会への参加率は高かった。こうした自治会組織を肯定的に評価している人も少なくなかった（鳥越 1994: 10-18）。

現在、自治会に関しては相反する二つの動きがみられる。一方は自治会の地域社会における比重を弱める動き、他方は自治会の法制化への動きである。そういった意味でも今後自分たちの地域社会をどのようにするのが問われている（鳥越 1994: 10-18）。

2.3 自治会の評価

2.3.1 自治会をめぐる議論

自治会についてはさまざまな形で議論されてきた。本稿ではこれまでの自治会に関する議論について以下の 5 点に整理したい。なお、分類にあたっては中田実による自治会をめぐる議論の整理を参照し、筆者の視点から若干修正を加えて用いている²⁾。

近代的な個人主義的市民像に立って、「ぐるみ型」をとる自治会を近代の市民社会とは相いれない組織として否定的にみる傾向のもの（「前近代的組織論」）。

「ぐるみ型」をとる自治会を、自治会だけでなく日本の各種集団にあらわれる、日本に固有な集団文化として受け入れようとするもの（「文化型論」）。

組織原理よりもそれが果たす多様な生活機能に着目し、そうした機能を果たしているかぎり、その存在の不可避性を説明することに力点を置くもの（「生活組織論」）。

自治会の特質（世帯加入・強制的加入・機能の未分化など）をふまえたうえで、自治会を自治体に準ずるものとしてとらえ、これを肯定するもの（「自治体擬制論」）。自治会が地縁による団体である点に注目して、自治会をそれが基盤とする土地の実質的な居住ないし占有（所有）関係、あるいは土地の共同利用とそれにもとづく共同管理の組織とみるもの（「所有・管理論」）。

2.3.2 戦後～1950 年代

戦時中、自治会が戦時対応組織として利用されたということは上述したとおりである。そのため、戦後このような地域住民組織を否定的に評価する論調が主流であった。多くの論者が自治会を日本の近代化や民主化に逆行する組織としてとらえていた（上記「前近代的組織論」）。たとえば、1953 年に『都市問題』という雑誌で、自治会問題の特集がなさ

れ、奥井復太郎や鈴木栄太郎といった代表的な社会学者が自治会についての以下のような見解を述べている。

近隣集団なるものは、その性格上身内集团的に偏狭・狭量で身びいきで好悪がはなはだしく公理公論の通らない、まことに厄介なものである。いたずらに公共的に組織化を云々すればこの状態の凝固を進めることになり近代性の追放となる。この運動が逆コースと見られるゆえんはここに起因するのであって、殊にわが国のように個人格の覚醒に遅れているところではその弊は著しいといわねばならぬ。(奥井 1953: 32)

隣組、町内会のごとき制度の強制的施行は文明の方向とも都市発展の方向とも逆行する措置である。(鈴木 1953: 22)

いずれの論者も自治会が個人ではなく世帯を単位として、国家が行政的な必要から地区全員を強制的に加入させる点に言及している。その上で、自治会という地域集団は個人を単位とする任意加入の集団が優勢になる近代化の流れに逆行する組織であり、前近代的な、いわば旧時代の遺物であるという認識では一致していた(上記「前近代的組織論」)。そして、自治会に対しては否定的な見解を示していた。

2.3.3 1960年代～1970年代

1960年代に入っても自治会を封建遺制としてとらえ、非民主主義的であるという「前近代的組織論」の論調が見受けられる。奥田道大は自治会について次のような見解を示している。

町内会の連合組織化が圧力の主体をより上位レベルに求める関係から、執行部と官僚機構の癒着化にもとづき、地方政治を実質的に空洞化し、また空洞化しないまでも、“第三の議会”なり“第三の政府”的色彩をつよめ、地方レベルの議会活動を実質的に牽制、体制系列化へのルートを promote する。(奥田 1964: 14)

奥田は上記のように述べ、自治会の圧力団体化が結果として地方政治を空洞化し、行政の末端機構化を促進していることを指摘している。奥田は上記の「前近代的組織論」の立

場にたった上で、自治会を否定的に捉えているものと考えられる。

しかしながら、徐々にではあるが自治会を再評価しようという論調もみられるようになる。とくに、自治会が日本固有の文化の型を備えているとする、いわゆる「文化型論」が主張され始めたのがこの頃である。この「文化型論」を強力に推進していったのが中村八朗である。中村は60年代に東京都日野市(当時は下日野町)と三鷹市でみずから実施した調査結果をもとに従来の自治会論を再検討すべきだとしている(中村 1962, 1964)。

中村は従来の自治会研究において主張されてきた自治会の特質を次の5つにまとめている。

- (1) 加入単位は個人でなく世帯。
- (2) 加入は一定地域居住にともない、半強制的または自動的。
- (3) 機能的に未分化
- (4) 地方行政における末端事務の補完作用をおこなっている。
- (5) 旧中間層の支配する保守的伝統温存基盤となっている。(中村 1990: 65)

中村はこのうち(4)および(5)については実際あてはまらない自治会があることを示した(中村 1962, 1964, 1965)。中村が調査した東京近郊の新しい団地などに組織された自治会のなかには、一切行政に協力しない自治会や、むしろ革新系の議員を擁立するなどの動きを示す自治会が存在していた。にもかかわらず、(1)から(3)の集団の組織形態を示す特性については、これらの自治会も旧来からの自治会となんら異なることはなかったのである。つまり、自治会が(1)から(3)の特質をもつからといって、前近代的な組織であるとは言えないということを中村は示した。そのうえで、「なぜ前近代的、あるいは農村的といわれる町内会が日本の都市に存続するか」を問えば「町内会が文化型となっているから」という結論に達したと述べている(中村 1990: 69)。中村は上記の「文化型論」の立場にたった上で自治会を肯定的に捉えているといえる。

また、70年代になって、安田三郎は中村の議論を受ける形で自治会を自治体として捉えるという考え方を提示した(安田 1977)。安田は「日本の文化様式の一つとしての町内会が成立する根拠」として、町内会が地方自治体的側面を有していることをあげている(安田 1977: 175-176)。自治会を自治体として捉えれば従来前近代的とされてきた町内会の特質(世帯単位・強制加入・機能未分化)への疑問も氷解すると主張する(安田 1977: 176)。

安田はまさに上記の「自治体擬制論」の議論を主張しているといえよう。また、広義に解釈すれば、上記の「文化型論」の流れをくむものと位置づけることができよう。

2.3.4 1980年代以降

1980年代以降、自治会に関する研究が盛んになってくる。各地で起きた住民運動の影響もあって、地縁にもとづく土地の共同が地域に対して何らかの権利を発生させるという考え方が主張されるようになる(上記「所有・管理論」)。ここですべてを取り上げることはしないが、以下自治会に関する三つの議論について言及しておく。

鳥越皓之は当該地域を占拠して住んでいることが発言権(決定権)をもつという考え方(「共同占有権」)を提唱し、土地居住ではなく、土地所有によって自治会が誕生すると述べている(鳥越 1994: 24-32)。

また、居住に着目した考え方を提唱したのが岩崎信彦らのグループである。彼らは町内会を「住縁アソシエーション」と定義している。つまり、「住むことを縁起(因縁生起)として形成されるアソシエーション」として自治会を位置づけている(岩崎 1989: 8-11)。

さらに、中田実は自治会を土地の共同利用に基づく共同管理関係として捉えている。中田は自治会を次のように定義している。

原則として一定の地域的区画において、そこで居住ないし営業するすべての世帯と事業所を組織することをめざし、その地域的区域内に生ずるさまざまな(共同の)問題に対処することをとおして、地域を代表しつつ、地域の(共同)管理に当たる住民自治組織である。(東海自治体問題研究所編 1996: 66-69)

自治会の要件として地域共同管理の視点を取り入れている点に特色がある。

この3者に大きな違いはないものと思われる。3者とも自治会が地縁による団体であることに着目している点では共通しているといえよう。ただ、自治会たる要件として、それを「所有」に求めるか、「居住」に求めるか、あるいは「地域共同管理」に求めるかにそれぞれの違いがあるのではないと思われる。また、3者とも自治会を地域住民の生活に必要な組織であるという言及(上記「生活組織論」)、自治会を自治体擬制的にみるような言及(上記「自治体擬制論」)がみられた(鳥越 1994; 岩崎 1989; 東海自治体問題研究所編 1996)。

2.3.5 自治会をめぐる議論のまとめ

自治会に関する議論が錯綜したので若干整理しておきたい。大きな流れとしては、戦後から 60 年代にかけて自治会は近代化に逆行する組織であるという見方が数多くなされてきた(上記「前近代的組織論」)。その後、中村を中心として自治会が日本固有の文化の型を備えているとする「文化型論」が 60 年代から 70 年代にかけて主張される(上記「文化型論」および「自治体擬制論」)。やがて、80 年代になると、住民運動の高まりなどもあって、住んでいることに何らかの権利の発生を認めて、地縁による団体である自治会を評価しようという考え方が出てくる(上記「所有・管理論」)。それと呼応する形で自治会が生活機能上必要な組織であるという言及もみられるようになる(上記「生活組織論」)。以上が自治会に関する議論の大まかな流れである。なお、表 1 はその流れを整理したものである。参考にされたい。

表 1 自治会をめぐる議論の流れ

	前近代的組織論	文化型論	生活組織論	自治体擬制論	所有・管理論	自治会評価
奥井(1953)・鈴木(1953)		×	×	×	×	否定
奥田(1964)		×	×	×	×	否定
中村(1962, 1964, 1965)	×		-	-	×	肯定
安田(1977)	×		-		×	肯定
中田(1980)	×	×				肯定
岩崎ほか(1989)	×	×				肯定
鳥越(1994)	×	×				肯定

出典：奥井(1953)、鈴木(1953)、奥田(1964)、中村(1962, 1964, 1965)、安田(1977)、

中田(1980)、岩崎ほか編(1989)、鳥越(1994)より作成

注)表のなかで、は主たる主張、は言及があったもの、×は否定的、-は言及なしとし

て整理した。丸数字は本稿 2.3.1 で示した番号と対応する。

2.4 問題提起

以上、本章ではこれまでの自治会の歴史および自治会研究の変遷について概括してきた。かつてはこうした自治会組織に対して否定的な評価を下すような意見が主流であったが、近年ではこうした組織を再評価しようという考え方が主流となりつつある。自治会組織を活かした形での地域活性化への取り組みもなされている。筆者は自治会組織を地域活性化に活かせるかどうかは地域住民が主体的になれるかどうかにかかっているような気がする。では、どうすれば自治会組織が地域活性化に寄与する組織となりえるのかについて本稿では問うてみたい。具体的にはどういった要素が自治会活動への参加の要因となるかを明らかにしたい。

3 自治会の活動事例及びその考察

3.1 本章の位置づけ

本章では筆者が行った4つの自治会組織のリーダー層への聞き取り調査をもとに自治会の活動事例の紹介とその考察を行いたい。4つの自治会の活動事例を通してどうすれば自治会組織が地域活性化に寄与する組織となりえるか考えてみたい。まず、4つの自治会の活動事例およびその考察を述べたうえで、本章全体の考察を述べたい。なお、調査対象者の要望により本章の一部については仮称で表記することをあらかじめお断りしておく。

3.2 活動事例1 - 山田区民会 -

3.2.1 地域概要

山田区民会がある山田地区は神戸市の東、東灘区の北西部に位置し、区域の南端には阪急神戸線、北側には六甲の山々がそびえたつ。区域内には住吉川の疎水が流れ、地域住民に親しまれている。風光明媚な土地柄もあって、かつては大きな豪邸が立ち並んでいたという。今でも高級住宅地としてその面影を残している。世帯数が約3000軒、住吉山手2～7丁目・9丁目全域、8丁目の一部、および鴨子ヶ原1～3丁目をその範囲とする大所帯である。地域の主なイベントとしては、本住吉神社のだんじり、若宮八幡宮のお祭り（子どもみこし）、山田区民運動会、盆踊り、まち歩きなどがある。そのほかにも多種多様なイベントが催されている。以下注目すべき活動に焦点を絞って述べていく。

3.2.2 六甲山と住吉川

上述したように、山田地区の北側には六甲山がそびえたつ。山田の人々は昔からこの六甲の山並みに愛着をもっていた。1956（昭和31）年に青年団組織である山田クラブが結成されるのだが、この青年団がのちの登山ブームの際、けが人を運んだりするなど自警的役割を果たしていたというエピソードもある。しかしながら、いくら若いからといって素人が山に入って救助するのは危険ということもあり、現在では警察や消防がその役割を担うようになっている。現在でも、毎年山桜や山桃を六甲山に植樹するなど山の整備の一部を担っている。また、山から取ってきた竹を活かして、盆踊りの舞台を作ったり、竹細工作りをするなど地域の資源を有効にそして大切に使っている。

また、六甲山系の南側に位置する山田地区の東側には住吉川が流れている。山田地区のなかにも住吉川の疎水が流れており、昔から水に恵まれた土地であった。山田地区の人々はこうした水を生活用水や防火用水として使っている。水はこの地の人々にとって生活に密着したものであり、また、憩いの風景ともなっている。住吉川やその疎水を大切にそしてきれいに使っていこうとする思いは強い。その住吉川の自然環境を守るために組織されたのが住吉川清流の会である。この会は住吉川流域の自治会、婦人会、子ども会などが中心となって1979（昭和54）年4月に結成されたものである。山田区民会もその一員として、清掃活動やイベントなどに参加している（住吉川清流の会 1999）。

このように山田地区の人々は六甲山や住吉川といった自然に愛着をもっており、これらをととても大切にしている。こうしたものを大切にしようという思いがさまざまな保全活動としてあらわれている。

3.2.3 若宮八幡宮の再建

若宮八幡宮は山田地区の地域の鎮守で、六甲山南麓赤塚山の裾野にある。由緒は不詳であるが、山田地方が開拓されたのが応仁の乱後（1470年頃）であるので、神社もその頃から勧請されていたのではないかとされている。1906（明治39）年には国から小規模で由緒不詳の神社はその地の氏神に合併するよう言われたが、山田の人たちは合併を拒否し、以来山田地区が神社を維持している（横田 1972: 177-179）。

1995（平成7）年1月の阪神大震災後も、いち早く本殿、神門などの再建に向けて区民会が一丸となって取り組み、現在では立派に再建されている。このとき、地域住民のこころのよりどころである若宮八幡宮を何とか再建したいとの思いから多くの寄附が集まったという。

現在、毎年 10 月 11 日に例祭が行われ子どもみこしが町内を練り歩くほか、年末にはもちつき大会が行われるなど地域住民の憩いの場となっている。

3.2.4 水車

住吉川流域には、江戸時代から水車小屋が多く立ち並び、川から引いた水路の水を利用しての油絞や製粉、酒造りのための精米などに使われていた。最盛期（明治末～大正中期）には、100 基近くの水車があり、このあたりには水車の音が響いていたという。その後、電力の普及により衰退し、また 1938（昭和 13）年の阪神大水害でその多くが焼失してしまった。それでも数基の水車は生き残り、戦後、製粉や線香作りの際に用いられていたが、昭和 48 年に最後の 1 基が線香工場のボヤで焼失してしまい、六甲山南麓から水車は姿を消した。

しかし、水車の名残の水路はその後住吉山手地区を縦横に走っており、震災時には消火や生活用水として使われた。また、酒米をつくのに使われていた石臼が地域のあちこちに見受けられ、水車の名残を忍ばせている。

こうした光景を目にするにつけ、水車のあった頃を知る山田の住民はその名残を惜しんでいた。会長さんは当時の思いをふりかえって次のように語ってくれた。

水車のことを知っている人たちも次第に少なくなり、このままでは後世に何も残らなくなってしまう。水車を通じて産業発達の歴史を知ってほしいし、何よりも地域のシンボルがこのままなくなってしまうのはあまりにも惜しい。³⁾

このような思いから山田区民会が中心となり、行政や住吉川清流の会とも連携しながら水車復元の話が進められた。紆余曲折を経ながらも話し合いが重ねられ、ようやく 2002 年（平成 14）年 10 月に大小 2 基の水車が山田区民会館西側の水路沿いに完成した。石積み石には住吉が主産地である「御影石」を用いるなど地域の資源を活かしている。また、木は吉野まで行って吟味し、吉野の組合の方々に協力もあって、樹齢 270 年の吉野の一本杉を水車に用いることができたという。

こうして住民主導で完成した水車のまわりには時折親子づれが訪れるなど地域の人々の新たなこころのよりどころとなりつつある。今後、水車の維持・管理の問題が大きな課題である。区民会としてはこの水車を地域の新たなシンボルとして後世に残していき、また、

水車を利用したイベントも追々行いたいという。

3.2.5 本住吉神社のだんじり

例年5月の連休時に行われる本住吉神社のだんじり祭りに大勢の山田の人々が参加している。だんじり祭りは主に若者が中心となって行われるが、若者だけでなく、子どもから大人、そして年配者に至るまで地域住民総出でまつりを楽しんでいる。なかにはだんじりのために生きているといった「だんじりきちがい」もいるという。

そもそも、だんじりが盛んになったのは明治時代までさかのぼるといふ。そのころのだんじりは形の大きいことと数の多いことで「灘のだんじり祭」として有名になり殷盛を極めた。一時期当時の社会情勢から中断されるものの大正末年には見事に復活し、阪神地方でも随一の「だんじり祭」として以前にもまして盛況を呈するようになった。戦後、神社も炎上したためだんじりの復活は困難かに思われたが、1950（昭和25）年には復活し、現在でもこの地の人々に親しまれるまつりとなっている（横田 1972: 107-111）。

だんじりに参加した人は皆「若仲」と呼ばれ、だんじりのときはもちろんのこと、それ以外にもバーベキューをするなど親交を深めている。また、だんじりの準備の際には若者が先輩にだんじりについての教えをこうといった光景もみられる。だんじりがいわば地域の価値となり、それを継続していくことが地域の価値の伝承につながっているといえるだろう。

3.2.6 そのほかの取り組み

そのほかの取り組みとしては山田区民運動会がある。この行事は毎年10月に区域内にある住吉中学校のグラウンドを借りて行われる。例年、地域の子どもから大人まで多数の人が参加しており、今年は約350人の人が参加したという。旧住吉村9地区でこのような区民運動会が残っているのは山田地区のみだという。

また、今年は7月に約30年ぶりに山田公園にて盆踊りが開かれた。「(地域で取れる)竹で組立てた矢倉」、「区民の人達のボランティアによる出店」等、地域の人々の知恵を活かした手作りのまつりができたという。当日は公園に入りきれないほどに老若男女問わず人々が集まり、お互いの親交を深めたという。今後できれば継続していければと考えているようであった。

さらに、山田地区の良さを見直そうという目的で今年数回にわたって、「まち歩き」が行

われた。このイベントはそもそも山田地区の旧跡・史跡を訪ね、山田のことを良く知ろうという目的で行われたものである。しかしながら、それ以外の効果もみられたという。最近引っ越してこられた方でこれまで地域の人とかかわりがなかった人がこれをきっかけに交流の輪を広げ、地域活動に参加するようになったという。

3.2.7 住吉学園

住吉学園は旧住吉村の財産管理団体である。旧住吉村9地区の自治会代表が理事となり、各自治会とは別組織で運営されている。住吉学園は各自治会に対して資金を助成しているほか、特に地域の教育に対して多くの助成をしている。山田区民会は9地区の1つである。

そもそも、住吉学園が旧住吉村の財産管理団体となったのは1950(昭和25)年のことである。当時、住吉村は神戸市との合併に消極的であった。当時の住吉村は非常に財政的に裕福であり、その財産を神戸市にもっていかれるのは困るというのがその理由である。しかし、神戸市が住吉村の財産を放棄したため、合併が実現した。このため、住吉村の財産を管理する組織が必要になった。そこで当時洋裁学校であった住吉学園にその財産を移管したというのが財産管理団体としての住吉学園のはじまりである(谷田 1968: 1-11)。

現在、財団法人住吉学園は六甲山に広大な土地を持ち、鴨子ヶ原1丁目、2丁目など約2000軒に土地を貸している。自治会活動がこれほど活発である一因としてある程度の資金力があるということが挙げられるであろう。

3.2.8 考察

これまで山田区民会の活動事例をみてきた。実は紹介した以外にも実にさまざまな活動をされており、ほぼ毎月1度は何かの活動をしているような状態である。こうした活動を維持するために月1回の定例の役員会以外にもさまざまな形で会合が開かれている。

なぜ、山田区民会はこれほどまでに自治会活動が活発なのか。もちろん、住吉学園からの助成もあって、ある程度の資金力があることもその一因であろう。しかしながら、同時に豊富な村有財産があったからこそ、それを管理することで自治意識が芽生えたともいえない。また、他の自治会組織に比べ、世帯数が多く、活動ごとに部分けがなされているなど役割分担ができていることもその一因であろう。

だが、筆者はそうした側面よりも別の側面を強調したい。山田地区の人々は古くから歴史や自然といったものを大切に守っていきこうという気持ちがあるように思える。歴史や自

然といったものに地域の価値（シンボル）を見出し、それを後世に伝えたいとの思いは強いようである。若宮八幡宮の再建や水車の復元というのは一度失われた地域の価値（シンボル）への名残惜しい思いから実現したものであるし、住吉川の清掃活動などは自分たちの心のよりどころである川を自分たちの手できれいにしようという思いが運動となってあらわれたものである。また、だんじりなどのイベントは地域の価値（シンボル）の伝承という側面とより一層地域がまとまるといった効果があるように思う。

3.3 活動事例 2 - 今出在家町自治会 -

3.3.1 地域概要

今出在家町は神戸市兵庫区の南、和田岬に位置する。北側は兵庫運河、東側は海に面している。1・2丁目は住宅地域、3・4丁目は工業地域と大まかに区分できる。昔ながらの下町という感じを受けるが、地域内全人口に占める65歳以上の人の割合が約32%であり、高齢化問題は深刻である⁴⁾。現在、220軒が今出在家町自治会に加入しているが、以前と比べて近年は減少の一途をたどっている。地域内には薬仙寺という由緒正しいお寺がある。主な活動としては新年会、薬剤散布、敬老会、子どもみこし、バスツアー（毎年ではない）、年末特別警戒などがある。あと、自治会の主催ではないが和田神社のだんじりにも参加している。以下同様に注目すべき活動について述べていく。

3.3.2 歴史・史跡

町内には僧行基が746年に開いたといわれる薬仙寺がある。この寺の名前は後醍醐天皇が隠岐国から帰京の途次、この寺の霊水を服薬用に差し上げたことから名づけられたという由緒ある寺である（田辺 1998: 158-160）。毎年3月17日には1945（昭和20）年の神戸大空襲の時に薬仙寺の周辺で亡くなった人を弔う行事が行われている。しかしながら、これは薬仙寺が独自に行う行事であり、自治会と薬仙寺が協力して行事を行うということはない。

また、現在の自治会館のあたりに生簀があったといわれている。生簀については「摂津名所図会」に、「長さ十三間、幅四間ばかり、鯛、鱧、鱸諸魚を多く放ち活けて常に貯う。これを兵庫の生洲という」と記されており、現在の自治会館のあたりにあったと言われている。こうした地域の歴史を残そうと震災で全壊した自治会館と会館横の南浜公園の整備を機に、「兵庫の生洲」の説明板が作られた。現在南浜公園は毎日清掃され、とてもきれい

で、お年寄りの憩いの場となっている。しかしながら、公園を使ったイベントなどは行われていない。

3.3.3 兵庫運河

小さな船が、明石海峡を通り、須磨の海岸ぞいを西から兵庫の港に入るとはたいへん危険なことであった。それは、和田岬をぐるりと回らなければならないうえに、潮の流れも速く、急に天候が変化した場合に船を非難させる場所がなかったというのがその理由である。そこで、和田岬に水路を作って兵庫の港に早く行けるようにしようと考えようになった。こうして作られたのが本線 1880m、支線 727m という日本一大きな運河であった兵庫運河である（神戸市教育委員会 2002: 109-110）。

戦前には汚水とヘドロで随分汚れていた兵庫運河も、戦後すべての産業の一時停止、人口の減少などによる下水の流入が少なくなったために一時期きれいな運河になりつつあった。ところが、経済成長とともに魚も住めない悪臭の漂う運河と化してしまった。しかしながら、20 年程前から公害に対する世論の高まりや行政による環境整備、付近住民の努力によって徐々に小魚が住めるきれいな運河に戻りつつある。

このように兵庫運河は日本でも有数の運河でありながら、これまで地域の人々でさえもあまり注目してこなかった。兵庫運河開削 100 周年を機に兵庫運河を観光地として売り出そうという案が出ており、行政と学校・地域・企業が連携して、ペットボトルによるイカダレースなども行われている。少しずつではあるが兵庫運河を活性化させようとする動きが見られる。大規模なプロジェクトとなるためそう簡単にことが運ばない面もある。今後兵庫運河活性化の取り組みは息の長いものになるであろう。

3.3.4 和田神社のだんじりと子どもみこし

この地域の大きなイベントとして 5 月には和田神社主催のだんじり、11 月には自治会主催の子どもみこしが行われる。

もともと和田神社のだんじりは江戸時代からひかれていたと言われている。しかしながら、戦争でだんじりが焼けてしまい、だんじりをひくことはできなくなった。しばらくお祭での巡行はしていなかったが、これではだんじりの名残も消えてしまうし、子どもたちに何かしてあげたいと思い、1976（昭和 51）年に自治会がだんじりの代わりとして子どもみこしを約 350 万円かけて購入する。この際、地域の人だけでなく、地域にある企業など

からも寄附があった。その後、和田神社の方でもだんじりを譲り受け 1985(昭和 60)年頃にはだんじりが復活した。近年では春祭りはだんじり、秋祭りは子供みこし、という形で地域の行事として定着している。

現在、だんじりの方は保存会もでき、基本的には和田神社がお祭を主催している。地域の人も多く参加している。いわゆる「だんじりきちがい」といわれるような人も地域内にはいるが、自治会がだんじりの運営に直接には関わっていないため、その人が自治会に深くかかわるといったことはあまり見られない。一方、子どもみこしの方も地域の人が積極的に参加してくれている。例年 150 人くらいの人に参加してくれるという。だんじりや子どもみこしを通して改めて地域としてのまとまりを感じるという。

3.3.5 自治会館の再建

現在の自治会館は 3 年前に再建されたものである。敷地面積が 40 坪、延床面積が 120 坪と自治会館としては非常に大きい建物である。この自治会館では役員会などの自治会の会合だけでなく、新年会や同好会、住民の交流の場である「ふれあい喫茶」やまつりの際に使われるなど地域活動の拠点となっている。

この自治会館は阪神淡路大震災復興基金や自治会費などで建てられたものである。しかしながら、それだけではない。自治会館は財産区の土地の上に建てられたものである。この今出在家町も財産区協議会を設置しており、他の自治会に比べ財政的には裕福であるという背景がある。兵庫運河を開削した際に得られた土地が主な財産である。この地域で比較的多くイベントができたり、立派な自治会館を再建できるのはこの財産区収入があるからといえる。

3.3.6 考察

本節では今出在家町自治会の活動についてこれまでみてきた。上述した山田区民会ほど活動は活発ではないが、子どもみこしやだんじり、兵庫運河への取り組みなど比較的一般的な自治会よりは活発に活動している。

その背景には上述した山田区民会と同様、財産区の収入があり、他の自治会に比べ財政的には裕福であるということがあげられるであろう。しかしながら、山田区民会のようなところまで活動が活発にならない背景には、自治会自体の規模の差もさることながら、他の地域にくらべ高齢化が進んでいるということもあろう。役員層が高齢化しており、なお

かつもともと規模が小さいことから役員への負担の集中といったことがあるようである。

今出在家町自治会もだんじりや子どもみこしを大切にするなど、地域の価値(シンボル)を見出しているように思える。だんじりや子どもみこしへの人々の思いは強いものがある。しかしながら、自治会がだんじりの運営に直接関わるわけではないので、だんじりに熱心な人を自治会活動に取り込めないといった面もある。また、兵庫運河という地域の価値(シンボル)を見出していながらそれを十分には活かしてきていないようである。

こうした地域の価値(シンボル)といったものを見出しながら十分には活かしてきえない背景には現時点で行われている行事を維持してだけでも苦しいのに、とてもそこまで手が回らないという実態があるものと思われる。

3.4 活動事例3 - 桜木町自治会 -

3.4.1 地域概要

桜木町は神戸市須磨区にある山陽電鉄須磨寺駅の北東の一角に位置している。海岸からの斜面地にあり、背後には須磨アルプスと呼ばれる六甲山の山並みが続いている。まさに、風光明媚で閑静な住宅地といえるであろう。380世帯が住んでおり、年寄が多く、20-30代が少ない。しかしながら、40-50代の人たちの子どもがいるので小中学生は比較的多い。最近では20-30代の人も増えつつある。住んでいる人はサラリーマンが多く、医師や教師なども多い。現在主に取り組まれている運動としては公園作りがあげられる。以下同様に注目すべき活動に焦点を絞って述べていく。

3.4.2 細い路地とまちの緑

桜木町の人たちは細い路地とまちの緑からかもし出されるまちの雰囲気といったものをこよなく愛している。桜木町には道幅4メートル未満、軽自動車はやっと通ることができるくらいの細い路地が網の目のように張り巡らされている。道幅が狭いことから、行き交う人びとも自然と声をかけあったり、そこで井戸端会議をはじめたりする。桜木町の人たちにとって路地は単なる道路ではなく、ちょっとした会話をするような交流の輪を広げる共有のスペースとなっている。また、桜木町はかつて屋敷地だったため、生け垣などにも緑が多く、独特の雰囲気をかもし出している。

こうした細い路地やまちの緑をこよなく愛しているため、そうしたものを守っていこうという思いも強い。自宅付近の路地の掃除は自分たちの日々の活動としてやっている。ま

た、桜木町のメインストリートである細い路地は近くの女子大の通学路にもなっていて、近年たばこのポイ捨てが目立つという。そこで、毎年新入生が大学に通いだす4月頃集中的にポイ捨てをする学生たちに注意を促すようにしている。また、女子大の方にも学生に注意を促すよう再三要請している。そうすると次第になくなっていくという。細い路地とまちの緑を大切に守っていこう、このまちの雰囲気壊さないようにしようという思いはこうした地道な活動となってあらわれている。こうした細い路地やまちの緑は桜木町の地域の価値（シンボル）となっていて、それを守っていこうという思いが強いものと思われる。

しかしながら、こうしたまちの雰囲気を壊しかねない出来事が過去にはあった。それが後述する大型道路建設問題である。

3.4.3 道路建設反対運動

この地域の自治会活動が活発になるきっかけは皮肉にも地域を二分する大型道路の建設問題であった。それまでの自治会はいわば形骸化しており、一部の有力者に権力が集中しているような状態であった。そこに震災の1年前（1994年）に区画整理の話が地域住民に突然知らされる。そのことをきっかけにして反対運動が盛り上がったという次第である。

そもそもその背景には一部の有力者が大型道路計画を勝手に承諾し、地域住民に知らせなかったことによる。行政側はその一部の有力者が承諾したこともあり、地域内の合意が得られているとみて、強引に事を進めようとした。そこに地域住民と行政との間で食い違いが生じたのである。

もともと桜木町の人びとは細い路地やまちの緑といった桜木町独特のまちの雰囲気といったものをこよなく愛していた。道幅は狭いけどそれほど不自由はしていなかった。そこへふってわいたように出てきたのが地域の真ん中に大型道路を建設する計画である。閑静な住宅環境が脅かされるという危惧から住民たちは立ち上がった。今まで自治会を牛耳ってきた一部の有力者を引きずりおろし、自分たちの手で自治会運営をするようになった。

その結果、道路建設反対運動は一応成功し、その後震災も起こったため、現在その計画は宙に浮いている状態である。この運動をきっかけに地域がまとまり、自分たちのまちは自分たちで守るという自治意識が生まれたように思われる。

3.4.4 公園づくり

震災時の混乱もおさまり、大型道路の建設も現実味を帯びなくなり、ほとぼりが冷めてきた。それと同時に一時期のような地域としてのまとまりも徐々に薄れてきた。そこで、再び地域としてのまとまりを取り戻そうという思いが桜木町児童公園の整備へとつながっていくことになる。

昔は庭が広く、子どもたちはその庭を歩き来して遊んでいた。その後、土地売却などで土地が細分化していき、そういう庭も消えていった。公園はもともとあったが、放置されていたので、雑草が生い茂り、とても遊べるようなところではなかった。使い勝手が悪く、人が目につけられないほどに放置された公園をこのまま荒れたまま放置しておくのはもったいない。公園を整備して地域の人たちの交流の場にしようという意見が自治会の会合のなかで出され、以後自治会として積極的に公園づくりに向けて動き出すことになる。

公園整備の費用は自治会費と神戸市のパートナーシップ助成が充てられ、現在自治会主導のもと着々と話が進められている。雑草を刈ったり、遊具にニスを塗るといった作業はすべて自治会の人たちで行っている。こうした自分たちの手で公園を作ろうといった活動をきっかけにこれまで自治会活動にあまり積極的でなかった人や若い人たちも参加してくれるようになったという。当初公園づくりの目的であったお年寄りと子どもたちの交流だけでなく、新しい人が自治会活動に入っていききっかけにもなっているということがいえるのではないか。

公園が完成したら、イチゴ狩りやたけのこ掘り、もちつきやおまつりをしたいという。まさに公園が新たな地域の価値（シンボル）となり、地域住民の共有スペースとして大切にしていこうという思いがうかがえる。

3.4.5 考察

これまで桜木町自治会の活動事例をみてきた。

桜木町が地域としてまとまるようになったきっかけは何ととってもやはり道路建設反対運動であろう。細い路地や豊かな緑に囲まれた閑静な住宅街に突如として浮上してきたのが道路建設計画である。これをきっかけに地域の環境を守ろう、閑静なまちなみをもっと大事にしていこうという気持ち、地域への愛着が芽生えたのではないではないか。こうした危機があって、地域の価値（シンボル）、地域が共同で守りたいものが顕在化したのではないかと筆者は考える。

しかしながら、震災などの影響もあって、道路建設が現実味を帯びなくなった。それと

同時に地域としてのまとまりも薄れつつあった。そこで発案されたのが公園づくりである。現在も、公園づくりは継続中であるが、これまでのあいだにも多くの地域住民が公園づくりに主体的にかかわっている。そして、この公園づくりが自治会へのかかわりのきっかけにもなっている。

これまで桜木町自治会はそれほど多くの地域活動を行ってきたわけではない。他の地区のようにおまつりやそのほかイベントをやっているわけでもない。ある意味一般的な自治会である。それが道路建設反対運動をきっかけに地域としてのまとまりをもち、現在そのエネルギーは公園づくりに向けられている。今後、この公園が地域活動の新たな拠点となり、ますます自治会活動も活発になっていくのではないかと。少なくともその可能性を秘めていると筆者は考える。公園づくりをとおして人びとのあいだで地域の愛着がより一層増していき、今後この公園を地域の価値（シンボル）として、地域住民で管理していこうという思いを強くするのではないかと。そしてひいては公園を大切に管理していこうという思いが自治会への参加への誘因になるのではないかと筆者は考える。

3.5 活動事例 4 - S 自治会 -

3.5.1 地域概要

S 自治会のある S 町は神戸市北区にある。もともと、六甲山系の高台を切り開いて開発された土地で、現在は住宅が密集している地域となっている。基本的に一戸建てが多いが、大豪邸といったような家はあまり見受けられない。住んでいる人はサラリーマンが多く、公務員や教師なども比較的多く住んでいるという。山を切り開いてできたため緑は多いが、急な坂も多く、自動車がなくて生活には困る地域でもある。世帯数が約 770 軒、S 町の 3 丁目、4 丁目をその範囲とする。主な活動としては、防犯・防火活動、美化活動、高齢者の交流のためのふれあい喫茶など定型的な活動が多い。

3.5.2 自治会の取り組み

S 自治会は上述した 3 つの自治会に比べ自治会活動は活発ではない。活動としても防犯・防火、美化活動など定型的なものが多い。地域として何か新しいことをしようといったような試みはみられない。ある意味一般的な自治会といえるのではなからうか。

自治会に無関心な人が多く、なかには「となりの人は何する人ぞ」といったような状況の人もいるという。地域活動に熱心でない人が多い背景には自分自身の生活にとくに不便

を感じていないということがあるのではないか。不便を感じていない以上、自治会をとおして何も言うことがなく、自治会にも熱心に参加しないということがあるようだ。

イベントに関してもあまり行われていない。親睦旅行と区のお祭りである「きたきた祭」への参加が主なものである。盆踊りなども行われていない。しかしながらこれには原因がある。地域内に大勢の人が集まれるようなスペースがないからだ。この地域は住宅が密集しているが地域の住民が集えるような公園が一つもない。盆踊りをしようにもそれをやるスペースが確保できないという問題がある。

地域内にスペースがないということは他にも問題がある。子どもたちの遊び場がないということだ。この地域は道が坂道でとても子どもたちが遊べるような状況ではない。空き地も少なく、子どもたちが遊んでいる姿を見ることは少ないという。子どもたちは普段地域外の小学校で遊んでいてこの付近で遊ぶことはないという。

かつて、空き地に公園を作ってほしいと要請したこともあるそうだが、土地を買い上げてまで公園を作ることは無理であると回答されたという。結局その空き地は隣接するお寺が購入した。そのお寺は自治会が何かイベントをするときはお貸しするといっているが、自治会がそこで何かイベントをするといった具体的な話には至っていない。

3.5.3 考察

この地域は先の3つの自治会に比べ活動が活発ではない。もちろん、自治会活動が活発でないひとつの原因に不便さを感じていないということがあげられよう。地域の現状に満足していて、それ以上はとくに望まないといった態度が見受けられる。しかしながら、いざ地域で問題が起きたときにこの地域の自治会活動が活発になるかは未知数である。

また、この地域には地域の価値（シンボル）といったものが見受けられない。他の地域には公園とかだんじりなど、地域みんなが愛着をもち、ともに大切にしていこうというものがあるが、この地域には見受けられない。そのことも、自治会活動が活発でないひとつの要因であるかもしれない。

3.6 小括

これまで4つの自治会組織の活動についてみてきた。山田区民会や今出在家町自治会は昔から比較的活発に活動している自治会であり、財政的にも豊かな自治会である。一方、桜木町自治会は最近になって活動が活発になってきた自治会である。そして、最後に地域

の維持に必要な定型的な活動を主として行っている S 自治会の事例を紹介した。

これらの自治会のリーダー層への聞き取り調査では次のようなことがわかった。まず第 1 に、自治会活動が活発なところは財政的に裕福なところであるということである。先の山田区民会も今出在家町自治会も財産管理団体もしくは財産区からの収入が助成金などの形で入ってくる。活動資金が豊富なため自治会の活動が活発であるという事実は否定できない。

しかしながら、筆者はそのことよりも次のことに焦点を当てたい。地域の価値（シンボル）や地域としてともに守っていききたいものがあるところは自治会活動も活発であるということである。水車やだんじり、豊かな緑や細い路地といったものが地域への愛着を創出し、それらを大切に守っていこうとする管理や維持の発想が生まれてくる。そしてそうしたものの管理主体となりうる自治会活動に参加するようになり、自治会活動が活発になるのではないかと筆者は考える。

では、人びとはどういったものを地域の価値（シンボル）、あるいはともに守っていききたいものと感じるのであろうか。筆者は次の 5 つをあげたい。

第 1 に自然があげられる。自然を大切に守っていこうとする気持ちが、山田地区の場合、六甲山の整備や住吉川の美化活動としてあらわれている。

第 2 に歴史を感じさせるものがあげられる。山田地区の水車や若宮八幡宮、今出在家町の兵庫運河などがその一例である。

第 3 にイベントがあげられる。山田地区や今出在家町のだんじりや子どもみこしなどがその一例である。

第 4 に共有のスペースがあげられる。公園や自治会館、路地などがその例としてあげられる。

第 5 にまちの雰囲気である。具体的に例示はできないが自然や構築物がいまって形成されるものである。

こうしたものがまちへの愛着の源となり、それをきっかけに自治会参加を促す要因になるのではないか。次章では統計データをもとにこうした地域の価値（シンボル）が自治会参加を促す要因となりえるか検証したい。

4 仮説の検証

4.1 本章の位置づけ

前章では4つの自治会の活動事例についてみてきた。何が自治会活動への参加を促す要因となりえるのか。前章では次のようなことがわかった。第1に財政的に豊かなところは自治会活動も活発であるということである。しかし、この点については本稿では取り上げないこととする。そのことよりも次の点に焦点をあてて以下述べていきたい。それは地域の価値（シンボル）や地域としてともに守っていきたいものがあるところは自治会活動も活発であるということである。では、地域の価値（シンボル）といったものにはどんなものが考えられるのか。筆者は次の5つに分類した。すなわち、それは 自然、歴史を感じさせるもの、イベント、共有のスペース、まちの雰囲気、である。本章ではこうした地域の価値（シンボル）といったものの有無が自治会への参加要因となるかを、統計データをもとに検証したい。

なお、本章では、神戸市市民参画推進局によって行われた「平成14年度神戸市民1万人アンケート『協働と参画のまちづくり』をめざして」(以下、1万人アンケートと略)を許可を得て使用している。同調査は2002年に20歳以上の神戸市民1万人の男女を対象として層化無作為抽出法による標本抽出を行い、2002年9月に郵送法による実査を行ったものである。有効回収標本は4214、有効回収率は42.1%である。

4.2 変数の設定

従属変数として使用した項目は「自治会活動などの地域活動に参加している」という項目である。回答はよくしている(=1)、たまにしている(=2)、あまりしていない(=3)、していない(=4)、の4件法である。なお、本稿の分析の際は、よくしている、たまにしているを「積極的」、あまりしていない、していないを「消極的」として変数加工している。

ちなみに回答結果は自治会活動への参加に積極的と回答した人が1451人(35.3%)、消極的と回答した人が2662人(63.2%)であった。さらに、詳細にみると、よくしていると回答している人が559人(13.6%)、たまにしていると回答している人が892人(21.7%)、あまり参加していないと回答している人が977人(23.8%)、参加していないと回答している人が1685人(41.0%)であった。自治会活動に参加していないと回答した人が41%もいることに自治会活動の難しさがあるように思う。

次に独立変数に使用した項目は以下のとおりである。「豊かな緑」、「歴史を感じさせる建物や言い伝え」、「お地蔵さん、小さな祠(ほこら)」、「地域の行事(祭り、運動会など)」、「愛着のある公園」、「立ち話ができそうなみちばた、路地」、「みんなが気軽に集まれる場

所」,「あなたが好きだと思ふまちなみ」,「ほかのまちとは違う独特の雰囲気」,以上の項目である。回答はある,ない,知らないの3件法である。

本稿では上述した独立変数と従属変数を用いてクロス集計を行い分析を試みている。なお,以下に記載しているデータはカイ2乗検定を行った結果,すべて統計的に有意な差がみられた。以下,その詳細を述べていきたい。

4.3 データの分析および考察

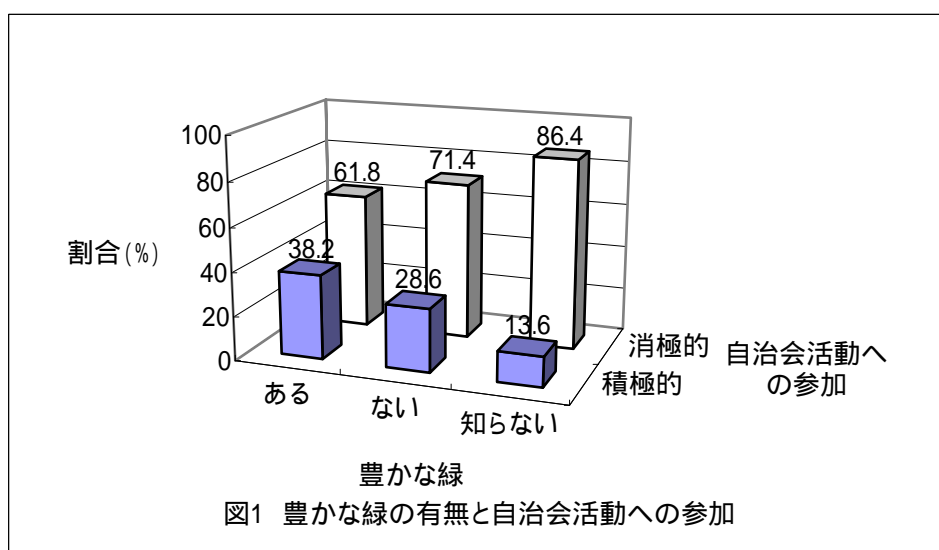
本節では,地域の価値(シンボル)の有無と自治会活動への参加態度との関連を上述した5つの分類にしたがってみていこうと思う。

4.3.1 自然

表2 豊かな緑の有無と自治会活動への参加

		自治会活動への参加		合計
		積極的	消極的	
豊かな緑	ある	度数 1157	1874	3031
		豊かな緑の % 38.2%	61.8%	100.0%
	ない	度数 246	613	859
		豊かな緑の % 28.6%	71.4%	100.0%
	知らない	度数 20	127	147
		豊かな緑の % 13.6%	86.4%	100.0%
合計		度数 1423	2614	4037
		豊かな緑の % 35.2%	64.8%	100.0%

注) カイ2乗検定値 57.967 自由度 2 $p < .001$



豊かな緑の有無と自治会活動への参加の態度をみたのが表2および図1である($p < .001$).

豊かな緑が地域にあると回答した人のなかで、自治会活動に積極的な人は38.2%、消極的な人は61.8%である。一方、豊かな緑がないと回答した人のなかで、自治会活動に積極的な人は28.6%、消極的な人は71.4%である。このことから地域内に豊かな緑があると回答した人のほうがそれがないと回答した人より自治会活動に積極的に参加していることがわかる。また、地域内に豊かな緑があることを知らない人のなかで、自治会活動に積極的に参加する人の割合は13.6%と低い。このことから豊かな緑があるかどうか知らない人のなかには自治会活動に消極的な人が多いことがわかる。

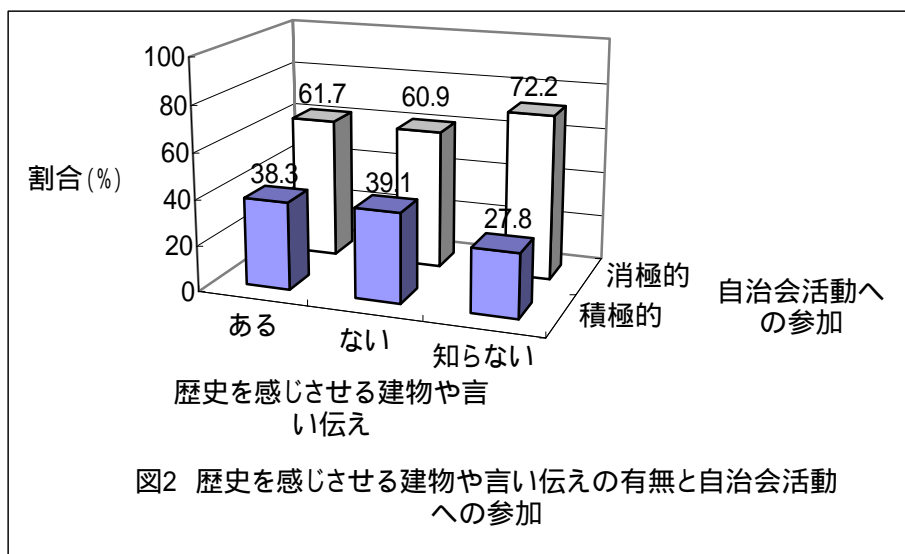
筆者は自然というものが地域への愛着を生み出し、ひいては自治会活動への参加を促すのではないかと前章で述べた。前章における六甲山の整備や住吉川の清掃活動といったものは地域の人たちがこうした自然に対して愛着をもっているからこそそれが行動となっており、あらわれているものである。統計上でも地域内に緑があると回答している人が自治会活動への参加に積極的であるということが示された。したがって、豊かな緑などの自然は地域住民の愛着の源になり、そうしたものへの愛着が自治会活動への参加へ向かわせるということが言えそうである。

4.3.2 歴史を感じさせるもの

表3 歴史を感じさせる建物や言い伝えの有無と自治会活動への参加

			自治会活動への参加		合計
			積極的	消極的	
歴史を感じさせる建物や言い伝え	ある	度数 歴史を感じさせる建物や言い伝えの%	488 38.3%	786 61.7%	1274 100.0%
	ない	度数 歴史を感じさせる建物や言い伝えの%	591 39.1%	919 60.9%	1510 100.0%
	知らない	度数 歴史を感じさせる建物や言い伝えの%	349 27.8%	905 72.2%	1254 100.0%
合計	度数 歴史を感じさせる建物や言い伝えの%	1428 35.4%	2610 64.6%	4038 100.0%	

注) カイ2乗値 45.366 自由度 2 p<.001

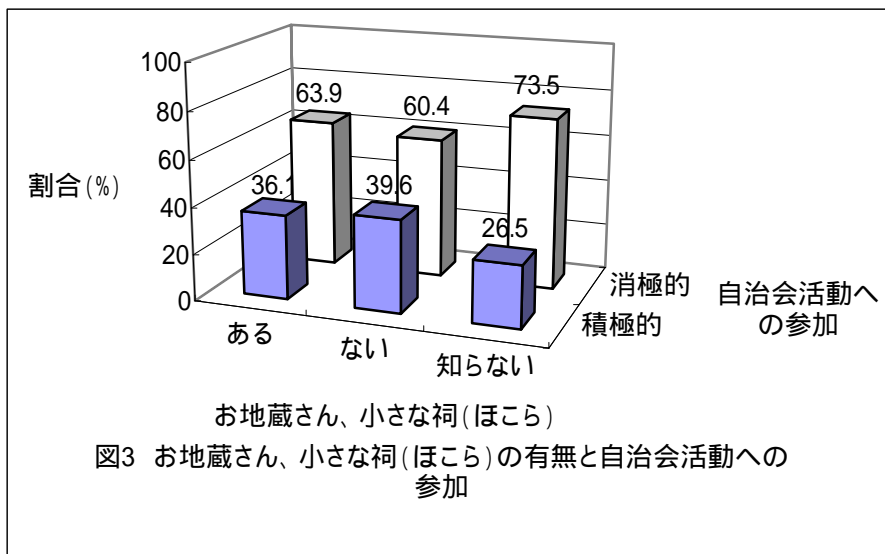


歴史を感じさせる建物や言い伝えの有無と自治会活動への参加の態度をみたのが表3および図2である($p < .001$)。歴史を感じさせる建物や言い伝えが地域にあると回答した人のなかで、自治会活動に積極的な人は38.3%、消極的な人は61.7%である。一方、そうしたものがないと回答した人のなかで、自治会活動に積極的な人は39.1%、消極的な人は60.9%である。このことから先ほどとは逆に地域内に歴史を感じさせる建物や言い伝えがないと回答した人のほうが、若干の差ではあるが、そうしたものがあると回答した人より自治会活動に積極的に参加していることがわかる。しかしながら、地域内に歴史を感じさせる建物や言い伝えがあるかどうか知らないと回答した人のなかで、自治会活動へ積極的に参加している人の割合は27.8%と先ほどと同様に低い。このことから地域の歴史的な建物や言い伝えを知らない人のなかには自治会活動に消極的な人が多いことがわかる。

表4 お地蔵さん、小さな祠(ほこら)の有無と自治会活動への参加

			自治会活動への参加		合計
			積極的	消極的	
お地蔵さん、小さな祠(ほこら)	ある	度数	767	1357	2124
		お地蔵さん、小さな祠(ほこら)の%	36.1%	63.9%	100.0%
	ない	度数	468	714	1182
		お地蔵さん、小さな祠(ほこら)の%	39.6%	60.4%	100.0%
	知らない	度数	201	557	758
		お地蔵さん、小さな祠(ほこら)の%	26.5%	73.5%	100.0%
合計	度数	1436	2628	4064	
	お地蔵さん、小さな祠(ほこら)の%	35.3%	64.7%	100.0%	

注) カイ2乗値 35.737 自由度 2 $p < .001$



お地蔵さんや小さな祠（ほくら）の有無と自治会活動への参加の態度をみたのが表4および図3である($p < .001$)。お地蔵さんや小さな祠があると回答した人のなかで、自治会活動に積極的な人は36.1%、消極的な人は63.9%である。一方、そうしたものがないと回答したひとのなかで、自治会活動に積極的な人は39.6%、消極的な人は60.4%である。このことから、表3にある結果と同様、お地蔵さんや小さな祠がないと回答した人のほうがそうしたものがあると回答した人より自治会活動に積極的に参加していることがわかる。しかしながら、お地蔵さんや小さな祠があるかどうか知らないと回答した人のなかで、自治会活動に積極的に参加している人の割合は26.5%と低い。このことからお地蔵さんや小さな祠があるかどうか知らない人のなかには自治会活動に対して消極的な人が多いことがわかる。

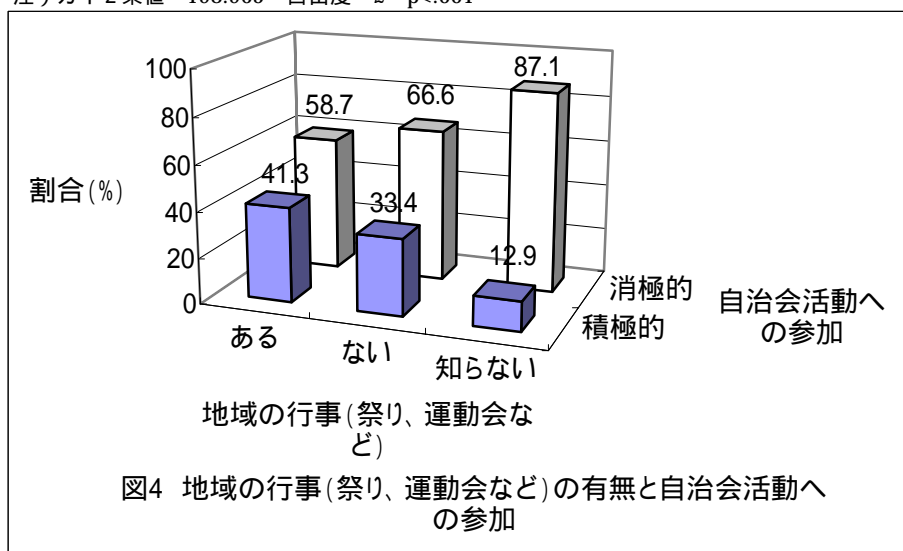
筆者は歴史を感じさせるものが地域への愛着を生み出し、ひいては自治会活動への参加を促すのではないかと前章で述べた。確かに上述した水車の復元や若宮八幡宮の再建といったものは地域の人びとがそうしたものに愛着をもっていたからこそなした行為である。しかしながら、統計上は表3,4のいずれの結果からみても、歴史を感じさせるものがないと回答した人のほうが、若干の差ではあるが、自治会活動に積極的に参加するという仮説に反する結果が出た。この点については今後さらに検討していく必要があるように思う。

4.3.3 イベント

表5 地域の行事（祭り、運動会など）の有無と自治会活動への参加

			自治会活動への参加		合計
			積極的	消極的	
地域の行事(祭り、運動会など)	ある	度数 地域の行事(祭り、運動会など)の%	1159 41.3%	1647 58.7%	2806 100.0%
	ない	度数 地域の行事(祭り、運動会など)の%	181 33.4%	361 66.6%	542 100.0%
	知らない	度数 地域の行事(祭り、運動会など)の%	90 12.9%	609 87.1%	699 100.0%
合計	度数 地域の行事(祭り、運動会など)の%	1430 35.3%	2617 64.7%	4047 100.0%	

注) カイ2乗値 198.965 自由度 2 p<.001



地域の行事（祭り，運動会など）の有無と自治会活動への参加態度をみたのが表5および図4である(p<.001)．地域の行事があると回答した人のなかで，自治会活動に積極的な人は41.3%，消極的な人は58.7%である．一方，地域の行事がないと回答した人のなかで，自治会活動に積極的な人は33.4%，消極的な人は66.6%である．このことから地域の行事があると回答した人のほうがそうしたものがないと回答した人より自治会活動に積極的に参加していることがわかる．また，地域の行事があるかどうか知らないと回答した人のなかで，自治会に積極的に参加している人の割合は12.9%と低い．地域の行事があるかどうか知らない人のなかには自治会活動に消極的な人が多いことがわかる．

筆者はイベントがきっかけとなって人びとが地域への愛着といったものをもつようになり，ひいてはそのイベントをつうじて自治会活動に参加するようになるのではないかと前

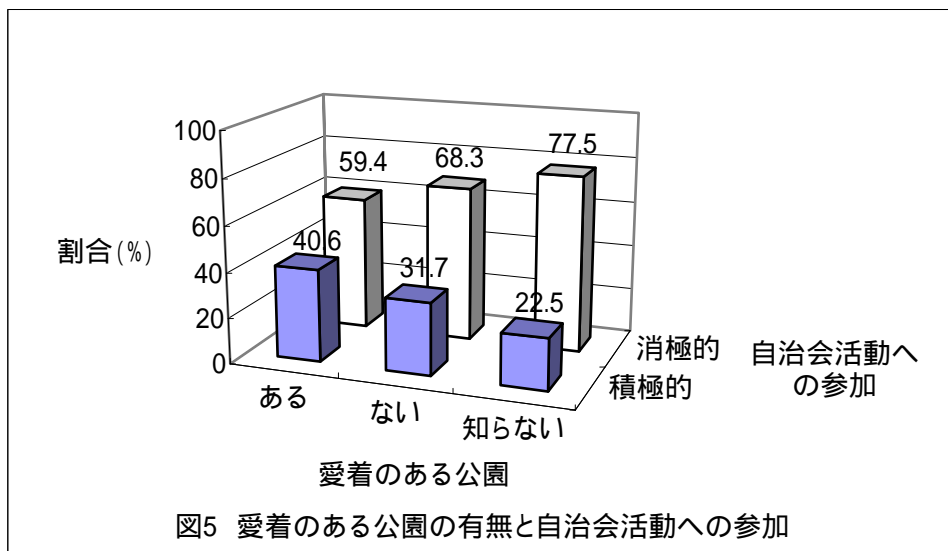
章で述べた．さまざまなイベントをとおして人々のあいだで交流が生まれ，地域への愛着がわき，そうした活動を維持していこうとする思いが自治会への参加につながるのではなからうか．上述したまち歩きのイベントではそれまで孤立していた方がこのイベントをきっかけに自治会活動に参加するようになった事例を紹介した．また，だんじりや子供みこしといったものはまさに地域の価値（シンボル）であり，それを後世に伝えていこうという営為である．聞き取り調査で得られた知見はイベントが自治会参加のきっかけになっているということであった．それでは統計データ上ではどうであったのか．統計上でも地域の行事があると回答した人のほうが自治会活動に積極的に参加していることが示された．したがって，地域の行事は地域住民が結集するひとつの要因であり，それを大事に守っていこうとする営為が自治会活動への参加に向かわせるということが言えそうである．

4.3.4 共有スペース

表6 愛着のある公園の有無と自治会活動への参加

		自治会活動への参加		合計	
		積極的	消極的		
愛着のある公園	ある	度数	792	1157	1949
		愛着のある公園の%	40.6%	59.4%	100.0%
	ない	度数	531	1146	1677
		愛着のある公園の%	31.7%	68.3%	100.0%
	知らない	度数	87	300	387
		愛着のある公園の%	22.5%	77.5%	100.0%
合計	度数	1410	2603	4013	
	愛着のある公園の%	35.1%	64.9%	100.0%	

注) カイ2乗値 61.939 自由度 2 p<.001

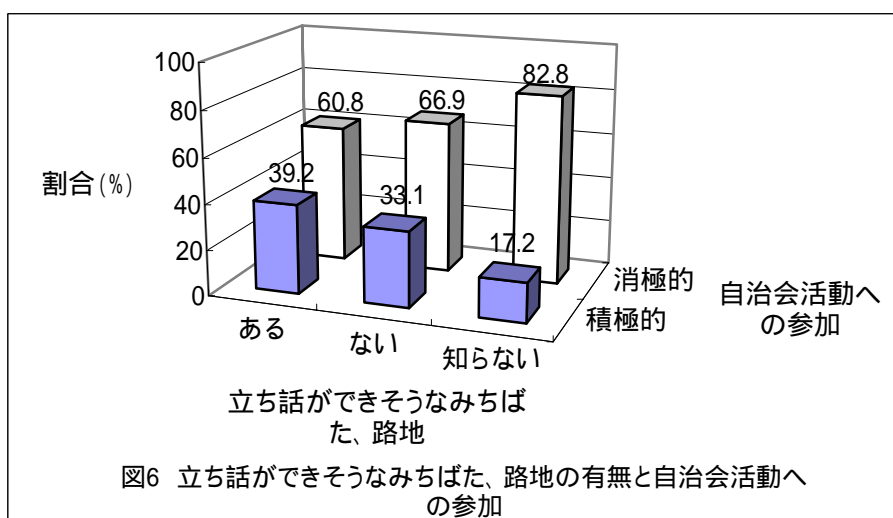


愛着のある公園の有無と自治会活動への参加の態度をみたのが表 6 および図 5 である ($p < .001$)。愛着のある公園が地域にあると回答した人のなかで、自治会活動に積極的な人は 40.6%、消極的な人は 59.4%である。一方、そうしたものがないと回答した人のなかで、自治会活動に積極的な人は 31.7%、消極的な人は 68.3%である。このことから地域内に愛着のある公園があると回答した人のほうがそうしたものがないと回答した人より自治会活動に積極的に参加していることがわかる。また、地域内に愛着のある公園があるかどうか知らないと回答した人のなかで、自治会活動に積極的に参加する人の割合は 22.5%と低い。このことから地域内に愛着のある公園があるかどうか知らない人のなかには自治会活動に消極的な人が多いことがわかる。

表7 立ち話ができそうなみちばた、路地の有無と自治会活動への参加

			自治会活動への参加		合計
			積極的	消極的	
立ち話ができそうなみちばた、路地	ある	度数 立ち話ができそうなみちばた、路地の%	1041 39.2%	1617 60.8%	2658 100.0%
	ない	度数 立ち話ができそうなみちばた、路地の%	311 33.1%	629 66.9%	940 100.0%
	知らない	度数 立ち話ができそうなみちばた、路地の%	76 17.2%	367 82.8%	443 100.0%
合計	度数 立ち話ができそうなみちばた、路地の%	1428 35.3%	2613 64.7%	4041 100.0%	

注) カイ2乗値 83.215 自由度 2 $p < .001$

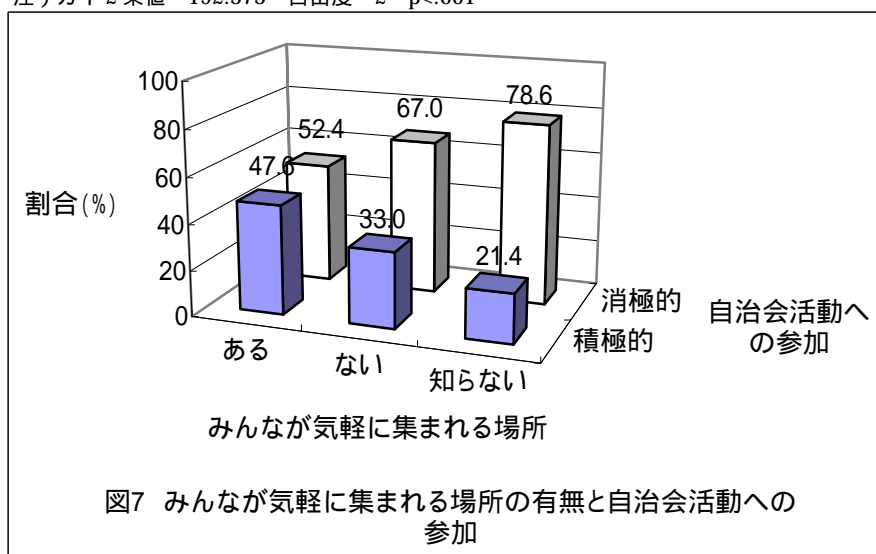


立ち話ができそうなみちばた，路地の有無と自治会活動への参加の態度をみたのが表 7 および図 6 である ($p<.001$)．立ち話ができそうなみちばたや路地があると回答した人のなかで，自治会活動に積極的な人は 39.2%，消極的な人は 60.8%である．一方，そうしたものが無いと回答した人のなかで，自治会活動に積極的な人は 33.1%，消極的な人は 66.9%である．このことから地域内に立ち話ができそうなみちばたや路地があると回答した人のほうがそうしたものが無いと回答した人より自治会活動に積極的に参加していることがわかる．また，地域内に立ち話ができそうなみちばたや路地があるかどうか知らないと回答した人のなかで，自治会活動に積極的な人の割合は 17.2%と低い．このことから地域内に立ち話ができそうなみちばたや路地があるかどうか知らない人のなかには自治会活動に消極的な人が多いことがわかる．

表8 みんなが気軽に集まれる場所の有無と自治会活動への参加

			自治会活動への参加		合計
			積極的	消極的	
みんなが気軽に集まれる場所	ある	度数	694	764	1458
		みんなが気軽に集まれる場所の%	47.6%	52.4%	100.0%
	ない	度数	479	974	1453
		みんなが気軽に集まれる場所の%	33.0%	67.0%	100.0%
	知らない	度数	234	858	1092
		みんなが気軽に集まれる場所の%	21.4%	78.6%	100.0%
合計	度数	1407	2596	4003	
	みんなが気軽に集まれる場所の%	35.1%	64.9%	100.0%	

注) カイ2乗値 192.373 自由度 2 $p<.001$



みんなが気軽に集まれる場所の有無と自治会活動への参加の態度をみたのが表 8 および

図7である($p<.001$)。みんなが気軽に集まれる場所が地域にあると回答した人のなかで、自治会活動に積極的な人は47.6%、消極的な人は52.4%である。一方、そうしたものがないと回答した人のなかで、自治会活動に積極的な人は33.0%、消極的な人は67.0%である。このことから地域内にみんなが気軽に集まれる場所があると回答した人のほうがそうしたものがないと回答した人より自治会活動に積極的に参加していることがわかる。また、地域内にみんなが気軽に集まれる場所があるかどうか知らないと回答した人のなかで、自治会活動に積極的に参加する人の割合は21.4%と低い。このことから地域内にみんなが気軽に集まれる場所があるかどうか知らないなかには自治会活動に消極的な人が多いことがわかる。

筆者は前章において共有のスペースがあるかどうか自治会活動への参加に影響を与えるのではないかと述べた。共有のスペースは公園や路地、自治会館などが考えられる。共有のスペースがあれば、そこに人が集まり、人と人との交流の輪が広がる。やがて、そうした場所への愛着が生まれ、共有のスペースを管理しようという意識が働くようになる。路地でのタバコのポイ捨て問題も地域の人たちがその路地に愛着をもっているからこそタバコを捨てた人に注意を促したり、清掃活動を行ったりするのである。また、共有のスペースがないことは地域活動に制約をもたらす。スペースがないと地域内でイベントをすることは困難になるし、何より日ごろの人びとのあいだでの接点がなくなる。共有スペースの有無は人びとの交流に影響を与え、ひいては自治会活動にも影響を与えるのではないか。これが聞き取り調査から得られた知見である。

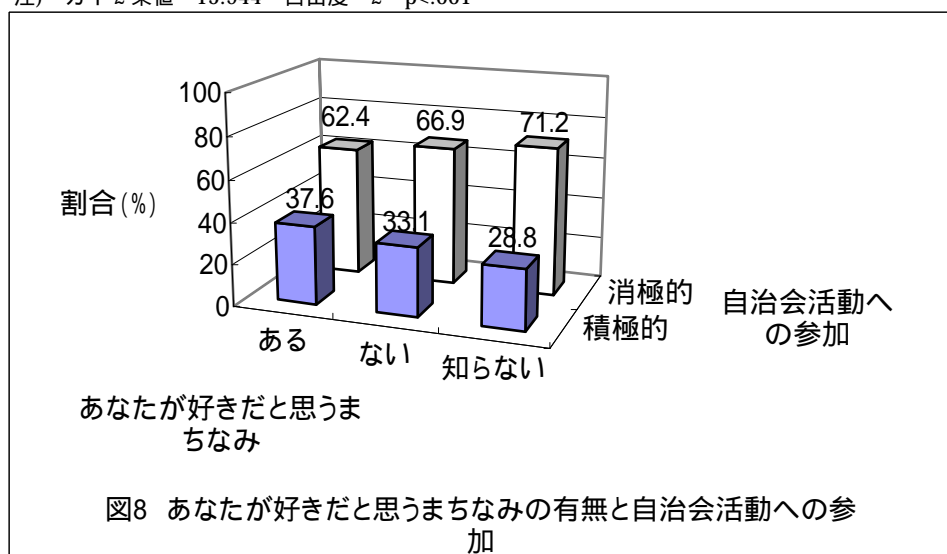
では、統計上はどうであろうか。表6、表7、表8のいずれの結果をみても、公園や路地といった共有スペースが地域内にあると回答した人のほうがそうしたものがないと回答した人よりも自治会活動に積極的に参加しているという結果が示された。したがって、共有スペースの有無は自治会活動の参加への態度に影響を与えるということが言えそうである。

4.3.5 まちの雰囲気

表9 あなたが好きだと思ふまちなみの有無と自治会活動への参加

			自治会活動への参加		合計
			積極的	消極的	
あなたが 好きだと思 うまちな み	ある	度数 あなたが好きだと思 うまちなみの%	813 37.6%	1350 62.4%	2163 100.0%
	ない	度数 あなたが好きだと思 うまちなみの%	444 33.1%	896 66.9%	1340 100.0%
	知らない	度数 あなたが好きだと思 うまちなみの%	130 28.8%	321 71.2%	451 100.0%
合計	度数 あなたが好きだと思 うまちなみの%	1387 35.1%	2567 64.9%	3954 100.0%	

注) カイ2乗値 15.944 自由度 2 p<.001



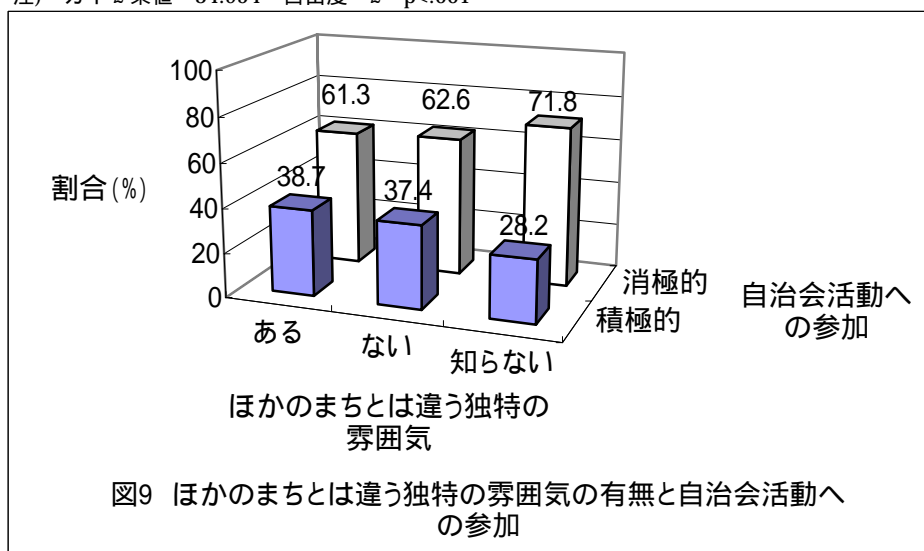
あなたが好きだと思ふまちなみの有無と自治会活動への参加の有無をみたのが表9および図8である(p<.001)。好きだと思ふまちなみがあると回答した人のなかで、自治会活動に積極的な人は37.6%、消極的な人は62.4%である。一方、そうしたものがないと回答した人のなかで、自治会活動に積極的な人は33.1%、消極的な人は66.9%である。このことから好きだと思ふまちなみが地域内にあると回答した人のほうがそうしたものがないと回答した人より自治会活動に積極的に参加していることがわかる。また、好きだと思ふまちなみが地域内にあるかどうか知らないと回答した人のなかで、自治会活動に積極的に参加する人の割合は28.8%と低い。このことから好きだと思ふまちなみが地域内にあるかどうか

か知らない人のなかには自治会活動に消極的な人が多いことがわかる。

表10 ほかのまちとは違う独特の雰囲気の有無と自治会活動への参加

			自治会活動への参加		合計
			積極的	消極的	
ほかのまちとは違う独特の雰囲気	ある	度数	534	847	1381
		ほかのまちとは違う独特の雰囲気の%	38.7%	61.3%	100.0%
	ない	度数	541	907	1448
		ほかのまちとは違う独特の雰囲気の%	37.4%	62.6%	100.0%
	知らない	度数	324	825	1149
		ほかのまちとは違う独特の雰囲気の%	28.2%	71.8%	100.0%
合計	度数	1399	2579	3978	
	ほかのまちとは違う独特の雰囲気の%	35.2%	64.8%	100.0%	

注) カイ2乗値 34.954 自由度 2 p<.001



ほかのまちとは違う独特の雰囲気の有無と自治会活動への参加の態度をみたのが表 10 および図 9 である ($p<.001$)。ほかのまちとは違う独特の雰囲気があると回答した人のなかで、自治会活動に積極的な人は 38.7%、消極的な人は 61.3% である。一方、そうしたものがないと回答した人のなかで、自治会活動に積極的な人は 37.4%、消極的な人は 62.6% である。このことからほかのまちとは違う独特の雰囲気があると回答した人のほうがそうしたものがないと回答した人より自治会活動に積極的に参加していることがわかる。また、ほかのまちとは違う独特の雰囲気があるかどうか知らないと回答した人のなかで、自治会活動に積極的な人の割合は 28.2% と低い。このことからほかのまちとは違う独特の雰囲気があるかどうか知らない人のなかには自治会活動に消極的な人が多いことがわかる。

筆者はまちの雰囲気というものが地域への愛着を生み出し、ひいては自治会活動への参

加を促すのではないかと前章で述べた。前章における桜木町自治会の道路建設反対運動はまさにその事例である。桜木町の人たちは細い路地とまちの緑からなる桜木町独特の雰囲気にも愛着をもっていた。そうしたところに突然道路建設計画がもちあがった。地域住民はまちの雰囲気を変えたくないという思いを確かなものにし、立ち上がった。それと同時にそれまで形骸化していた自治会活動にも携わる人が増えてくるのである。こうした事例からまちの雰囲気への愛着が自治会活動への参加を促す要因になるのではないかと考えた。

では、統計上はどうであろうか。表9、表10のいずれの結果をみてもまちへの愛着といったものがあると回答した人のほうがそうしたものがないと回答した人より自治会活動に積極的に参加しているということが示されている。したがって、まちの雰囲気といったものに対する愛着が自治会活動への参加へ向かわせるということが言えそうである。

4.4 小括

本章では地域の価値（シンボル）といったもの地域への愛着を生み出し、ひいては自治会活動への参加へと促す要因となるという仮説の検証を行った。筆者が地域の価値（シンボル）として分類したのは次の5つであった。すなわち、自然、歴史を感じさせるもの、イベント、共有スペース、まちの雰囲気、である。そのうち、自然、イベント、共有スペース、まちの雰囲気、といったものについては自治会への参加を促す要因となりえることが示せたと思う。しかし、歴史を感じさせるものについては自治会への参加を促す要因とはなりえなかった。なぜ、このような結果が出たのかはわからない。この点に関してはさらに詳細な分析が必要であるものを思われる。しかしながら、そのほかの4つの項目についてはこの仮説が妥当するよう思われる。

5 自治会組織の再考

5.1 自治会の必要性

これまで自治会の活動事例や「1万人アンケート」の統計データをとおして自治会の活性化について議論を進めてきたが、ここで改めて自治会の存在理由について考えてみたい。

なぜ、自治会が必要なのか。それは地域には共同で管理しなければならないものが存在するという事実である（中田 1990）。例えば、地域の景観保全にしても、そうした活動に取り組む主体は住民である。行政に任せればよいという考え方もあるかもしれない。しかしながら、行政は必ずしも地域住民のニーズにあった行動をとるとは限らない。桜木町の

事例がそうである。行政側は交通事情から大型道路の建設を計画したが、住民側は景観保全を主張して意見が食い違った。また、自発的な市民によるボランタリーな組織に任せればいいという考え方もあるかもしれない。しかしながら、こうした組織は特定の課題を解決させるために組織されたものであり、特定の問題解決には寄与するが、地域の包括的な問題を解決するには至らないことが多い。このように考えてみるとやはり地域の問題解決には住民の声が必要であるし、その組織化が必要である。そうした意味でも自治会の果たす役割は大きいと考える。

地域共同管理の組織の重要性を指摘しているのは中田実である。中田は次のように述べる。

地域生活の共同的基盤をなす諸条件は、住民内の階層によってその利用や関心に差があるとしても、わが国では基本的にはすべての人々が住民として共通に関わるものであり、そのために、これら諸条件への対応には住民の共同の意思をふまえることが必要とされる。地域共同管理とは、こうした地域の共同生活諸条件に対する住民としての関与（参加）の意思の表明であり、その意思の総合とつきあわせ、その結果にもとづくこれら諸条件のよりよい状態（より高度な真の共同利用を可能とするような）での維持、改善、統制である。（中田 1990: 203）

このように中田は地域共同管理の重要性を指摘し、そのためには住民の参加が必要であると述べている。そして、地域共同管理の組織として自治会を評価している（中田 1990）。

5.2 自治会への参加への誘因

それではどうしたら住民の自治会への参加が促せるのか。筆者はこれまでまちへの愛着をもつこと、難しく言えば地域に対する帰属意識を高めることが住民の自治会参加にとって重要であると述べてきた。では、そうした帰属意識はどういうものから生まれるかというと、自然、歴史を感じさせるもの、イベント、共有スペース、まちの雰囲気であると述べてきた。

こうした議論はいままでなされてこなかったのか。そうではない。従来の研究においてもこうした議論はなされている。

田村明はまちづくりの議論のなかで地域の価値の重要性を指摘し、地域の価値から愛着

が生まれ、それがまちづくりへの原動力となると述べている（田村 1999）。

地域の価値を発見し認めれば、住民には地域への誇りも愛情も湧いてくる。住んでいる所が好きになり、愛着が湧くなら、そこをもっとよりよくしてゆきたいと思うだろう。それが次の行動へと移らせ、いっそうよい「まち」をつくってゆくだろう。（田村 1999: 57）

さらに田村は地域の価値を、風土的価値（気象、自然など）、歴史的価値（遺産、事件、物語、記憶など）、人の営み価値（物、仕事、生活、仕組み、イベントなど）の3つに分類し、こうしたものを発見し、創造していくことがまちづくりには大事であると述べている（田村 1999: 60-61）。

自治会活動についても同じことがいえるものと筆者は考える。なぜなら、自治会活動もまちづくりも地域をよりよくしたいという目的において一致しているからである。

他にもそうした議論がある。それはコモンズという考え方である。コモンズとは「所有権が設定されていないゆえに商品化・市場化されていない資源」のことをさす（地域社会学会編 2000: 308-309）。もともとは、「共有地」「入会地」など自然資源（特に土地）に関する概念として捉えられてきた。しかし、この概念を公園や歴史的建築物などあらゆる共有物に広げて考えていこうとする議論がみられる。林春男らは『神戸市震災復興総括・検証生活再建分野報告書』のなかで、「都市のコモンズ」と題して次のように述べている。

今まで多くの場合、公共的なもの、個人的なものという2つの形で考えていたが、今回の整理で3つめの形として出てくるのが、我々が「都市のコモンズ」と呼ぶことにした、中間の部分である。具体的には、まちの中にある「緑」、「公園」などのオープンスペース・パブリックスペース、まち全体がかもし出す「まちの風情」といった、とらえどころがなかったり、どちらも積極的に主体にはなっていない部分というのが、「まち」という観点からみると、「まち」の格を決めていたり、「まち」のあり様を非常に強く規定しているものとして、もっと積極的に価値付けていかなければならないのではないかというのが我々の結論である。（林編 2000: 27）

また、上記報告書をもとに作成された「神戸市復興計画再建プログラム」のなかで、こ

うした「都市のコモンズ」が地域への愛着を生み出し、地域活動への参加を促し、地域活動が活性化することが述べられている（神戸市 2000: 17-20）。

筆者がこれまで地域の価値（シンボル）と述べてきたものはコモンズと同義である。こうしたコモンズが人びとの地域への帰属意識を高め、ひいては自治会活動にも参加するのではないかということが従来の議論でも確かめられたといえよう。本稿はこうした従来の議論を再度検証する形となったといえるのではないだろうか。

6 結論

これまで自治会のリーダー層への聞き取り調査や「1万人アンケート」の統計データをもとに自治会組織の可能性を模索してきた。筆者が本稿において述べたかったことは自治会組織は地域の活性化に寄与する組織であるということである。そのうえで、自治会活動を活発にさせる要素は何かを具体的に探ってきたつもりである。

2章ではそれまでの自治会の歴史とその評価を概括したうえで、近年ではこうした自治組織を肯定的にとらえる見方が主流となっていることを述べた。そのうえで、自治会が地域活性化に寄与する組織となるためにはどういった要素が必要か。もっと具体的に言えば、地域住民を自治会活動に参加させる要因は何か、それを探りたいと問題提起した。

3章では聞き取り調査をもとに上記の問題提起に対して次のような仮説を立てた。地域の価値（シンボル）といったものが地域内に存在するかどうか自治会活動への参加に影響を及ぼすのではないか。地域の価値（シンボル）といったものが人びとのまちへの愛着を高め、ひいてはそうしたものを守っていこうとする自治会活動にも参加するようになるのではないか。以上のような仮説を立て、さらに、地域の価値を、自然、歴史を感じさせるもの、イベント、共有スペース、まちの雰囲気、の5つに分類した。

それを受けて4章では上記仮説を検証した。その結果、自然、イベント、共有スペース、まちの雰囲気、の4点については自治会への参加を促す要因となりうることを示した。しかしながら、歴史を感じさせるものに関しては仮説に反して自治会への参加を促す要因とはなりえないという結果が出た。そのうえで歴史を感じさせるものについては更なる検討が必要であると述べた。

そして5章では改めて地域共同管理組織としての自治会組織の重要性を述べた。そのうえで、地域の価値（シンボル）が愛着を生み出し、自治会活動への参加へと向かわせるといった考え方が従来の議論でなされてきたか検討した。まちづくり論やコモンズ論のなかで

もこうしたことがすでに指摘されていることが確認された。そして本稿がこうした考え方を再度検証する形になったのではないかと述べた。

自治会の参加への誘因となりえるものはまちの価値(シンボル),あるいはコモンズといったものであるということが明らかになったと思う。人びとはそうしたものに愛着を感じ、そうしたものへの愛着が地域への帰属意識を生み出し、ひいては自治会活動への参加を促し、地域が活性化していく、ということが限定はつくがいえそうだ。今後の課題としては歴史を感じさせるものが果たして地域の価値となって自治会活動への参加を促すかどうかのより詳細な分析が必要であろうと思われる。

(40字×30行, 総ページ数ページ)

(400字詰め原稿用紙換算 76枚)

[付記]

本稿作成にあたり、聞き取り調査にご協力いただいた山田区民会、今出在家町自治会、桜木町自治会、S自治会の関係者の皆様、聞き取り調査実施の際に調査対象者の方々に協力を要請していただいた神戸市市民参画局の古川正幸さん、津志田総穂さん、統計データの使用を許可していただいた神戸市市民参画局の方々、そして、指導教授である立木茂雄教授、T Aの黒宮亜希子さん、以上の方々にご協力いただきましたことを感謝いたします。

[注]

- 1) 本節作成にあたっては、鳥越(1994)を主に参照し、あわせて玉野(2002)、東海自治体問題研究所編(1996)、吉原(2002)を参照した。
- 2) 東海自治体問題研究所編(1996: 50-51)参照。ちなみに中田実は次の6つに分類している。近代的な市民像にたって、「ぐるみ型」をとる町内会を近代の市民社会とは相いれない組織として否定的にみる傾向のもの。逆に「ぐるみ型」をとる町内会を、町内会だけでなく日本の各種集団にもあらわれる、日本に固有な集団文化として受け入れようとするもの。組織原理よりもそれが果たす多様な生活機能に着目し、そうした機能を果たしているかぎり、その存在の不可避性を説明することに力点を置くもの。長い歴史をもつ町内会には、合併によりなくなった町村を引き継いでいるものもあることをふまえ、町内会を自治体に準ずるもの(地域区画性、全戸加入制、行政末端制等)とみるもの。町内会が地縁による団体である点に注目して、町内会をそれが基盤とする土地の実質的な占有(所有)関係としてみようとするもの。町内会が地縁による団体である点に注目する点は第5の見方と重なるが、土地の所有ではなく共同利用とそれにもとづく共同管理の組織とみるもの。

- 3) この部分については山田区民会会長吉田省三氏への聞き取り調査から引用した。
- 4) 神戸市の平成 14 年 10 月 31 日現在の住民基本台帳法及び外国人登録法に基づく登録人口より作成。ちなみに神戸市の人口に占める 65 歳以上の人の割合は約 18%である。

[参考文献]

- 林春男編, 2000, 『神戸市震災復興総括・検証生活再建分野報告書』京都大学防災研究所。
- 岩崎信彦ほか編, 1989, 『町内会の研究』御茶の水書房。
- 神戸市, 2000, 『神戸市復興計画推進プログラム』。
- 神戸市教育委員会, 2002, 『わたしたちの神戸 3・4年』。
- 中村八朗, 1962, 「都市的発展と町内会 - 都下日野町の場合」『地域社会と都市化(国際基督教大学社会科学研究所 紀要)』8: 79 - 154。
- 中村八朗, 1964, 「三鷹市の住民組織 - 近郊都市化に伴うその変質」『近郊都市の変貌過程(国際基督教大学社会科学研究所 紀要)』10: 99-178。
- 中村八朗, 1965, 「都市町内会の再検討」『都市問題』56(5): 69-81。
- 中村八朗, 1990, 「文化型としての町内会」倉沢進・秋元律郎編『町内会と地域集団』ミネルヴァ書房, 62-108。
- 中田実, 1980, 「地域問題と地域住民組織 - 地域共同管理主体形成論序説 - 」『地域問題と地域政策(地域社会研究会年報)』2。
- 中田実, 1990, 「コミュニティと地域の共同管理」倉沢進・秋元律郎編『町内会と地域集団』ミネルヴァ書房, 191-216。
- 中田実, 1993, 『地域共同管理の社会学』東信堂。
- 中田実ほか編, 1998, 『地域共同管理の現在』東信堂。
- 奥田道大, 1964, 「旧中間層を主体とする都市町内会 - その問題点の提示 - 」『社会学評論』14(3): 9-14。
- 奥井復太郎, 1953, 「近隣社会の組織化」『都市問題』44(10): 23-33。
- 住吉川清流の会, 1999, 『住吉川清流の会 20周年記念誌』。
- 鈴木栄太郎, 1953, 「近代化と市民組織」『都市問題』44(10): 13-22。
- 玉野和志, 2002, 「都市町内会論の展開」鈴木広監修『地域社会学の現在』ミネルヴァ書房, 75-88。
- 田村明, 1999, 『まちづくりの実践』岩波書店。
- 谷田盛太郎編, 1968, 『財団法人住吉学園誌』住吉学園。
- 田辺真人, 1998, 『神戸の伝説』神戸新聞総合出版センター。
- 地域社会学会編, 2000, 『キーワード地域社会学』ハーベスト社。
- 鳥越皓之, 1994, 『地域自治会の研究』ミネルヴァ書房。

東海自治体問題研究所編，1996，『町内会・自治会の新展開』自治体研究社．

安田三郎，1977，「町内会について - 日本社会論ノート - (5)」『現代社会学 7』講談社，4(1)：173-183．

横田正紀，1972，『本住吉神社誌』本住吉神社．

吉原直樹，2002，『都市とモダニティの理論』東京大学出版会．